

光と闇

karinomaki

はじめに

哲学や、何かをがんばれば、必ず苦しいことが追いかけてくるものだと思います。それは本当です。しかし、上昇する努力を人は続けたほうが良いと思うのです。それが、本当に意味があることと思うのです。そのことについて、考えてみたいと思います。

闇の物質

宇宙に、ダークマター、ダークエネルギーという、謎の闇の物質と力があるそうです。これらは、宇宙にとって大きなカギをにぎっているにもかかわらず、謎だらけで、まだ解明されていないそうです。私は、哲学をするとき、何かを強引に何かに例えてしてしまうくせがあるのですが、今回は、この二つの、謎の物質と力を、この世界と、人の心の闇に例えてみることにします。

心の闇

少し暗いですが、この世界は、心の闇で成り立っているのかもしれないと、私は考えることがたびたびあります。それは、決して後ろ向きな考え方ではないのです。苦しいから、怖いから、人は光を求めて上昇していくからです。もしも、この世界が幸せで成り立ち、暗い気持ちが存在しなかったらどうなるでしょうか。きっと、あらゆる努力が必要なくなり、人は楽をしてばかりいるようになる気がします。苦しいから「もがく」のです。そして、より確かなものを築く努力をし続けるのです。心の闇はきっと必要があるのです。宇宙に闇の物質が必要であるように。

弱さとの戦い

哲学もそうですし、あらゆる学問や、スポーツは、自分の弱さとの戦いであり、エゴイズムや、人に負けたくないという、少しかくしておきたい欲望との葛藤が必ずあり、完全に人間臭さを抜けてしまうと、その仕事には深みがなくなってしまいます。

では、どうして人は戦い続ける必要があるのでしょうか。つかれはてて、もう楽になりたいと思いつながらも、やはり強さをもとめて、人は、何かをやり続けてしまいます。たとえぼろぼろになっても……。

カントの純粹理性批判

私は、哲学者のカントの純粹理性批判の中に、この姿を見るような気がします。決して答えを定めず、人間の理性を批判し続けることで人の認識の限界をこえようと柱を立てていき、しかし、決してのぼりつくすことができないということを示しているところに。カントは、悟性（知性）による人間の思考を、経験なしでは成立しないと書いていますが、もし、人の存在の素晴らしさだけに目をあてれば、人間の思考は世界に光をつくるものと言えます。しかし、本当は、思考の中には、苦しかった、悲しかった、怖かったという、マイナスの経験の土台がじわじわと入り込んでいくのです。人には闇の土台が、逃げても逃げても、やはり存在するのです。カントは理性を批判し、マイナスと戦うことで、上昇する柱を立てて人の限界にせまっているのですが、そこにとてつもない強さを感じます。

いやなものが大切？

人はよく、いやなことを思い出させるものを捨ててしまったりしますが、私はあえてそうしませんでした。いやな出来事を乗り越えて今があると思えば、不思議といやな思い出は尊いものとなります。しかし、正確に言うと、人はいやな思い出を乗り越えていないのかもしれませんが。いやな思い出はどうしても、トラウマとなって、人を苦しめていきます。決して受け入れられないこと、乗り越えられないものはあって当然なのです。

もし、自分は何にでも勝てるという、自信にみちあふれた人がいるとすれば、その人は、何かすごいものを手に入れることのできた人かもしれません。それは、ものすごい努力の末に手に入れたものなのかもしれません。

しかし、カントのような大哲学者ですら、それは本当には得られていないのです。いいえ、もしかしたら、本当にすごい人は、何かを手に入れて安心したりはできないのかもしれないのです。なぜかという、本当に偉大な人は、逆に、人間の力が決しておよばない、もっとすごい力が存在することを知ってしまうからなのです。

どうしていやなものを捨てないのか・・・そのことをカントから学ぶと、カントは人間の思考をただの光だとは考えていないのです。それを徹底的に批判的に見て、もし、悟性（知性）が本当にプラスの意味だけ持ち絶対ならば、その力が神のように世界を創造してしまうときだけだと考えているのです。カントは人間がマイナスから成立するからこそ、自分の無力を知り、光を求め、プラスを求めて上昇しつづける、努力しつづけることを、きっと知っていたからこそ、批判哲学を書き続け、マイナスの地から柱を立て続けた、そして、どんなに素晴らしい著書を書いても哲学をやめなかった。しかし、それでいて、どんなに書き続けても、ますます、神の偉大の前に、自然の偉大の前に、人が限りなく無力であると思いついていったのではないのでしょうか。それは、カントが偉大だからなのだと思うのです。

躓きの石

私は、「躓きの石」という、カントが自由の難しさを表した言葉を、ある指輪に名付けて持っています。それが、私の「いやなもの」です。しかし、いつも、もっと素敵なものはないか、心から信じられるお守りはないものかと常に思っていました。その指輪は苦しみを吸収するものでしかないのです。しかし、私は苦しみの石しか手にすることはありませんでした。カントが実践理性批判で表しているように、自由がプラスの側面しかもたないはずはなく、自由は苦しみと責任を背負う覚悟とともにあるからです。もし、何からも守られるようなお守りがあると、「自分は神に守られる、選ばれた存在である」と、思ってしまうかもしれません。そして、「世界は光でできている、素晴らしい世界だ」と思います。それはとても素敵なお守りです。しかし、私はあえて、その考え方を求めるのをやめてしまったのです。それは、カントの哲学を勉強するうちに、そうなったのです。どうしてわざわざいやなものを大切に持つのか、どうして世界を明るいものと考えられないのか・・・自分は暗い人間だと思いますし、嫌われることもあると思います。しかし、宇宙はほとんどが闇なのです。人はその謎を解き続けなければいけません。「がんばる」ということも、もし、人が幸せに生きることだけが全てならば、必要ないような気がしてしまうのです。なぜならば、いつか、選ばれた人だけの楽園ができるのなら、人はそこで何をして暮らすのでしょうか。その時、この世という、苦しい世界はなくなっています。そして、宇宙の中の闇もきっと消えています。そうすれば、宇宙の謎を解き明かす必要はもうないのです。ですから、宇宙物理学もなくなってしまうと思います。人の心の謎も、人が感じるのが幸せな気持ちだけならば、研究する必要がありません。心理学もなくなってしまうのです。そして、哲学もありません。神の世界のようなところにみんながいれば、人の限界をこえた世界について哲学する必要もないのです。それではつまらない！！と私は思うので、やはり闇は必要と考えてしまうのです。

カント

カントは純粋理性批判を書いたあと、世の中の無理解に苦しめられました。ほとんどの人がその難しさのため、ちゃんと意味を理解せず、カントは自分が十数年の年月を無駄にしてしまったとさえ思ったそうです。がんばることの好きなひとは、この気持ちを知っているはず。「自分は何のためにがんばったのだろう。全て無駄だったのかもしれない」と思うことは、生きていればたくさんあります。しかし、がんばったことは、たとえうまくいかなくても、必ず次の道をつくったり、いつか大きく花開いたりします。闇は、決して抜けきれず、また同じところにひきもどされるマイナスのものでいて、必ず人のプラスをつくっているのです。

戦い続ける

人は生きていくかぎり、戦い続けるもの・・・そう考えるとなんかしんどくなったりしますよね。カントは、哲学で人間の思考の限界にせまろうとし、そしてそうすることで、逆に人間の無力さを思い知ってしまったかもしれません。しかし、人はやはり偉大なのです。なぜ偉大なのか・・・それは、苦しみに立ち向かい続けるからだと思います。ときには人生に負けて挫折し全てがいやになり、生きていたくないと思い、しかし、立ち直ってまたがんばっている・・・そんな、人の強さを神様は心から愛し、闇という試練を、世界と人の心にあえてプレゼントしたのだと思います。いつか人が素晴らしいものをつくるために。（カントの純粋理性批判のような・・・）